# 教室をこえて自ら学び合い、自己の変容を捉えて学びを実感する子どもの育成
## ～主体的・対話的で深い学びの実現を目指した国語科授業実践を通して～

熊本市立出水南小学校　教諭　久連松　慧美香

**要　約**

国語科授業において、主体的・対話的で深い学びを生み、子どもたちが、言語活動の基盤である言葉の力を高め合うことのできるような授業を目指した。本研究を通して、子どもにとって必然性のある課題に出会う導入、ＩＣＴを活用した協働的な学びを経て、学び方や成果物のルーブリックを用いた評価の工夫を行えば、子どもは相手意識・目的意識を持って、教室をこえて自ら学び合い、自己の変容を捉えて学びを実感していくことが明らかになった。

＜キーワード＞　国語科　必然性のある課題　ICT の活用　協働的な学び　ルーブリック

### 1　主題設定の理由

（1）教育の今日的課題から

国語科授業において育成すべき資質・能力について、平成２９年改訂の学習指導要領解説国語編では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力」と明示されている。国語科授業において、この資質・能力、つまり身に付けたい力を育成することは、すべての言語活動の基盤となる言葉の力を磨いていくことへつながる。さらに、身に付けたい力を、教室をこえて実生活に生かせるような、主体的・対話的で深い学びを生み出す学習活動の充実を図ることが重要である。水戸部（２０２１）は、「子どもが何をどのように学ぶのか」という視点で、目的や価値、必要性を実感できる学習活動の重要性を指摘している。子どもたちが教室をこえて、もっと学びたい、解決したいといった必然性のある課題に出会うことが、主体的な学びへつながる。さらに、単元を通して、身に付けたい力を獲得し、それらを活用して他者との学び合いによって解決を図るという協働的な学びが、対話的な学びの充実へつながると考えた。

さらに、評価が子どもとともに学習の見通しと振り返りの共有化が図れることが、いわゆる指導と評価の一体化となり、その実現が極めて重要である。熊本市においても、「令和版学びわくわく熊本市の授業づくり」では、評価につながる学習の振り返りは、子どもの学習改善と教師の指導改善の両面において重要であると指摘されている。単元のゴールに目指す姿を子どもと共有していくことで、子どもができるようになったことやわかったことを自覚するといった、自己の変容を捉えて学びを実感していくことで、深い学びにつながると考えた。

（2）子どもの実態から

本年度は、３年生３３人を担任している。４月当初、ペアでの意見交流では話し始めても、普段出会うことのない相手との学習の場になると、戸惑う姿を多く見かけた。「何と言ったらいいのかわからない。」等の理由だった。また、学んだことが他の学習で生かせないでいることがあった。学んだことを生かしていく必要性を実感できずにいるのではないかと考えた。

そこで本研究では、教室をこえて「学びたい」という意欲が高まり、身に付けたい力を生かして解決を図りたいと子どもが思うような、必然性のある課題との出会いの工夫が必要ではないかと考えた。さらに、他者と自らかかわり合い、学び合う協働的な学びの場を意図的に取り入れていく。

そうすることで、教室内での学びで終わるのではなく、教室をこえて生かされる学びとなるように、学習活動を工夫することが必要だと考えた。

## 2　研究の仮説

子どもにとって必然性のある課題に出会い、ICT を活用した協働的な学びと、ルーブリックを活用した評価の工夫を行えば、主体的・対話的で深い学びが生まれ、子どもは教室をこえ、自ら学び合い、自己の変容を捉えて学びを実感するだろう。

## 3　研究の視点

視点１　必然性のある課題に出会う導入の工夫

視点２　ＩＣＴを活用した課題解決を目指す協働的な学びの工夫

視点３　ルーブリックを活用した評価の工夫

●ルーブリックとは

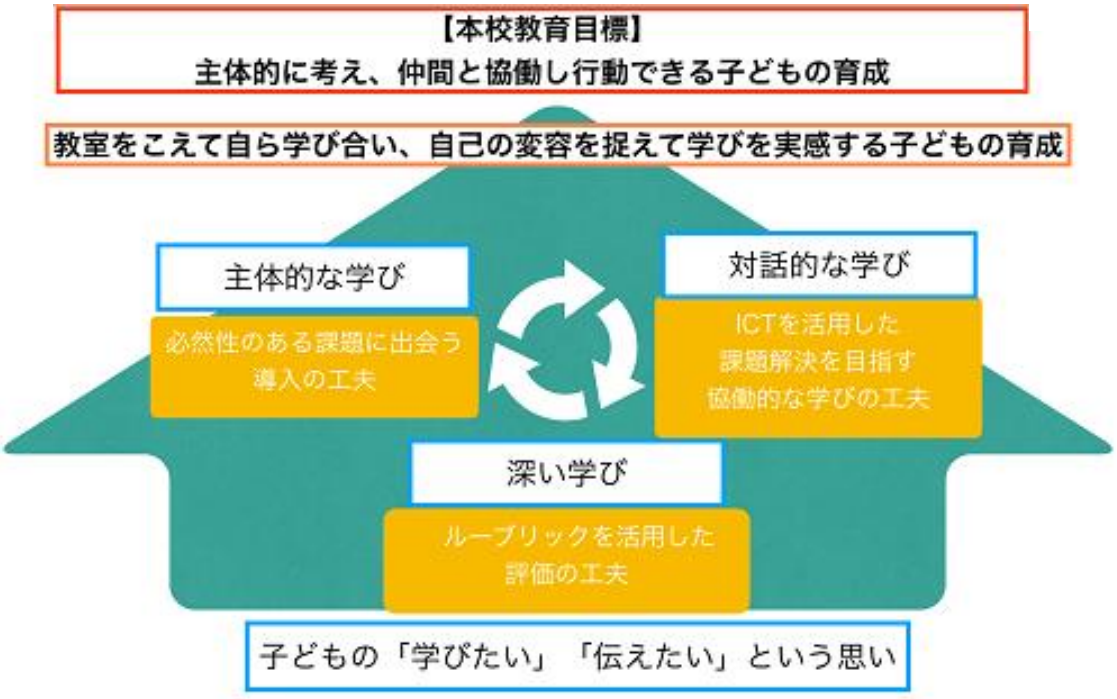
ルーブリックとは、西岡・石井（２０１９）は、「記述語から成る評価基準表」であり、具体的な学習の到達点を明確にした評価の指標と位置付けている。本校の校内研究では、「学び方のルーブリック」と、「成果物のリーフレット」を、子ども自身が学びを実感できる評価の工夫として取り入れ、実践している。「学び方のルーブリック」とは、「自ら」（主体的な学び）、「みんなと」（対話的な学び）、「生かす」（深い学び）の観点で、子どもたちの学び方の具体的な姿を表したものである。毎時間の自分の学び方を４段階で振り返り、学びの変容を記述していく（図１）。「成果物のリーフレット」とは、単元の最後に目指したい具体的な姿を記述してある評価指標のことであり、単元ごとに異なる。

学び方　ルーブリック

| かんてん | S | A | B | C |
|---|---|---|---|---|
| 自ら | 今日することが分かり、やる気をもって進んでがんばり、今日のめあてがたっせいできた。友達にもアドバイスをすることができた。 | 今日することが分かり、やる気をもって進んでがんばり、今日のめあてがたっせいできた。 | 先生や友達に手伝ってもらって、今日することが分かり、今日のめあてがたっせいできた。 | 今日することが分からず、今日のめあてをたっせいできなかった。 |
| みんなと | 自分の考えをもち、進んで友達と考えを伝え合うことができた。友達の考えのよさを見つけ、伝えることができた。 | 自分の考えをもち、進んで友達と考えを伝え合うことができた。 | 先生や友達に手伝ってもらって、自分の考えをもち、伝え合うことができた。 | 自分の考えをもつことができず、友達と考えを伝え合うことができなかった。 |
| 生かす | 新しい気づきや問い、考えなどを伝えようとした。これからの学習にいかそうとした。 | 新しい気づきや問い、考えなどを伝えようとした。 | 先生や友達に手伝ってもらって、新しい気づきや問い、考えなどを伝えようとした。 | 新しい気づきや問い、考えなどがなかった。 |

【図１　学び方のルーブリック】

## 4　研究の構想図　（図２）




【図２　研究の構想図】

## ５　研究の実際

（１）検証授業の概要

学びを積み重ねていくことの重要性から、本研究では１学期と２学期に実践した中からそれぞれ１実践ずつ取り上げ、その変容を追うことで仮説の検証を行う。この２単元は、国語科授業において、読み取ったことをもとに、書くことを通して身に付けたい力の育成を目指して実践した。

①　検証授業①（７月実践）の概要

ア　教材「ほけんだよりを読みくらべよう」（東京書籍３年上）

イ　学習指導計画（１０時間取り扱い）

課題　１学期だよりを作って、１学期がんばったことをおうちの人に知らせよう。

第一次　教材文「ほけんだよりを読みくらべよう」を読み、書き表し方の工夫を知る。

第二次　学んだことを生かして１学期だよりを作成し、保護者と感想交流を行う。

②　検証授業②（１２月実践）の概要

ア　教材「パラリンピックが目指すもの」（東京書籍３年下）

イ　学習指導計画

課題　リーフレットを作って、６年生のみんなにパラリンピックの魅力を伝えよう。

第一次　教材文「パラリンピックが目指すもの」を読み、要約をする。

第二次　学んだことを生かしてリーフレットを作成し、６年生と感想交流を行う。

（２）７月実践での検証

①　視点１　必然性のある課題に出会う導入の工夫

７月実践で身に付けたい力である、「相手や目的に応じて、伝えたいことを選び、理由や事例の取り上げ方や図や表の使い方を工夫し、書き表す力」を高めるために、子どもたち自身が自分の頑張りを伝える１学期だよりを作成し、保護者へ伝えるという課題設定を行った。

７月、学級内でのペアやグループ活動にも少しずつ慣れ、自分の意見を相手へ伝え始めた子どもたち。１学期に頑張ったことを尋ねると、「本を５０冊読みました。」「苦手な縄跳びでできるようになった技が増えました。」と喜々として伝え合っていた。子どもたち一人ひとりが、１学期の自分の成長を感じている中、通知表がないこともあり、学級での様子を保護者の方へ伝える機会がないことに気付いた。すると、「１学期に頑張ったことをおうちの人に伝えたい」という相手意識・目的意識が生まれ、教材文「ほけんだよりを読みくらべよう」の単元の最後に、「１学期だよりを作っておうちの人に伝えよう」と必然性のある課題を見いだした。

教室をこえ、一番身近な他者である保護者へ伝えるという課題設定は、子どもの伝えたい意欲を高め、主体的な学びへつながっていった。

②　視点２　ＩＣＴを活用した課題解決を目指す協働的な学びの工夫

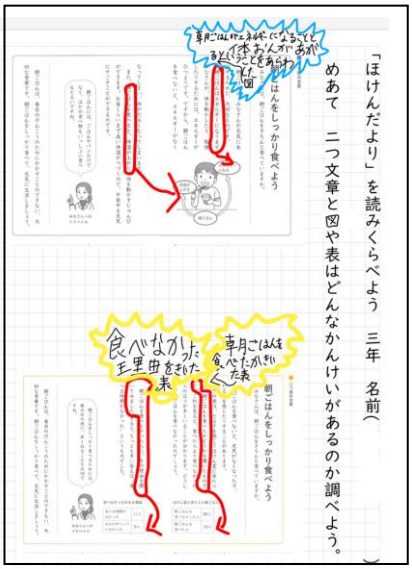
ａ　課題解決の手立てを探る教材文を用いた協働的な学びの工夫

導入で、１学期だよりを作成するために、相手に伝わる書き方の工夫を学ぶ必要があることに気付かせた後、教材文を用いて学習を進めた。教材文の読み取りを通して本単元で身に付けたい力を高め、課題解決を目指すために、以下の３段階の学習過程で実践した。

| |
|---|
| １　筆者の主張と文章の組み立て（はじめ、中、終わり）を読み取る。 |
| ２　二つの文章を読み比べ、伝えたいことに合わせた事柄のちがいを読み取る。 |
| ３　二つの文章と図や表の関係を問い、事柄に合わせた図や表の関係を読み取る。 |

この学習では、MetaMoJiClassRoom を活用した。本単元では、２つの文章を比較することで、書き方の工夫を読み取っていく。そのため、２つの文章を上下に配置したシートを用いることが、読み取りに効果的であると考えた。また、ＩＣＴを活用することで、子どもたちも自由に書きこみの工夫を行い、シートを用いた他者との話合いが活性化していった。

学習過程３で、話合い後の子どもの記述（図３）をみると、図や表に対応した説明の部分を線でつないでいる。さらに何を表した図や表なのかを記述しており、事柄に合わせた図や表の関係を読み取っていることがわかる。このように、ＩＣＴを活用した課題解決が、子どもたちの対話的な学びを生み、教材文の読み取りを深めていったと考える。



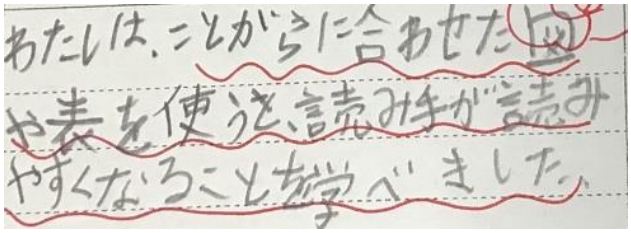

【図３　シートの記述】

b　課題解決を目指す協働活動の工夫

１学期だよりを作成するときには、図４のように、ＩＣＴを活用して１人１枚のシートを作成した。このとき、ＩＣＴに不慣れな点も多かったため、比較的作業がしやすく、枠組みなどを共有しやすいロイロノートを活用した。その後、１学期だよりの推敲は、３人グループの協働的な学びで行った。

【図４　１学期だより】

３人で推敲することで、ペアよりも人数が多く、より多角的な視点でのアドバイスが増える。さらに少人数であることから、話し合いやすく、協働的な学びも活性化すると考え実践した。実際に、グループでの推敲後、図５のように、「事柄に合わせた図や表を使うと、読み手が読みやすくなることを学べました。」とふり返っている。課題解決に向けた協働的な学びが促され、書き方の工夫を見いだすことにつながった。



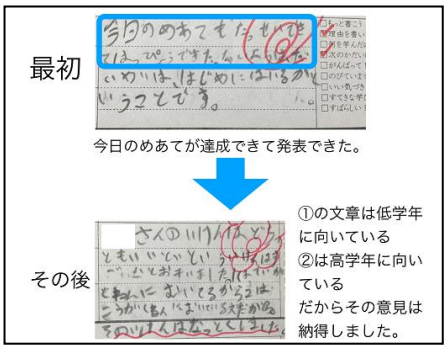

【図５　推敲後の振り返り】

③　視点③　ルーブリックを活用した評価の工夫

a　学習の見通しと振り返りの共有化を図る毎時間の評価の工夫

毎時間の学習の振り返りを、学び方のルーブリックを用いて行った。

図６のように、書くことに苦手意識を持っていた子どもは、最初は「めあてが達成できた」といった簡潔な記述が多かった。しかし、毎時間学び方の振り返りを積み重ねていくことで、友達の意見から学んだことやその理由を記述できるようになっていった。この振り返りの積み重ねが、子どもが自己の変容を捉えていくことにつながったと考える。




【図６　振り返りの変容】

b　子どもとともに作る成果物のルーブリックをもとにした評価の工夫

単元ごとに設定した課題に対して、成果物のルーブリックを活用した評価を実践した。このルーブリックは、単元で身に付けたい力をもとに教師が大枠を作成し、教材文の読み取りを終えたときに、子どもたちとともに考え、作り上げていくようにした。

７月実践では、教科書本文の読み取りの後、子どもたちへ、「１学期だよりを作るときに、学んだことでいかせる点は何か。」と問いかけた。すると、それまで毎時間行っていた振り返りを見返しながら、「伝えたいことに合わせた事柄の選択」と「図や表の活用」という、この単元で身に付けたい力につながる視点を子どもたち自身で見いだすことができた。これを生かして、１学期だよりのルーブリックを図７のように作成した。ルーブリックを用いるのがこのとき初めてだったので、より子どもたちにも理解しやすいように、図化して示した。

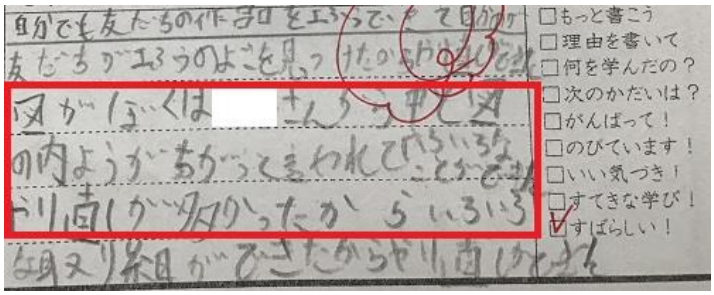
実際、１学期だよりを読み合った後の振り返りで、「中（の説明）と図の内容がちがうと言われて（中略）やり直しが多かった。」と記述している姿が見られた（図８）。ルーブリックをもとに推敲することで、自己の学びを振り返り、事柄に合わせた図や表を用いることの大切さに気付き、よりよい表現へ高め合うという、自己の学びの変容を生む深い学びにつながった。

子どもたちの意見をもとに作成したルーブリック

「１学期だより」のルーブリック　　＊どんな１学期だよりを目指すのか？

| 内容・表現 | S | A | B | C |
|---|---|---|---|---|
| はじめ、中、おわりを使って書いている。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| つたえたいことに合わせて、ことがらをえらんで書いている。 | ○ | ○ | ○ | |
| ことがらに合わせた図や表を使っている。 | ○ | ○ | | |
| さらに読み手をひきつけるくふうがしてある。 | ○ | | | |

【図７　成果物のルーブリック】

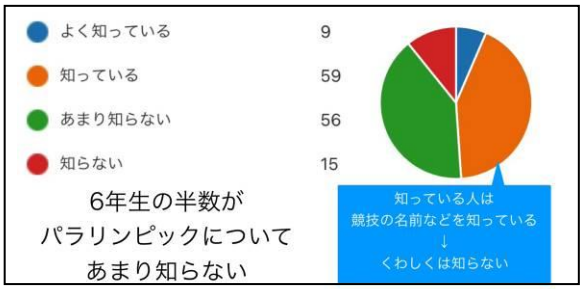



【図８　子どもの振り返り】

（３）　１２月実践での検証

①　視点１　必然性のある課題に出会う導入の工夫

７月実践を経て、いろんな人へ自分から伝えたいという意欲が高まっていた子どもたち。１２月実践では、単元の最後に、「リーフレットを作って６年生にパラリンピックのみりょくを伝えよう」と課題を設定した。２０２１年はオリンピック・パラリンピックイヤーであり、子どもたちも関心が高かった。さらに、学校の最上級生である６年生は、本単元を知らず、パラリンピックについて知らないことも多いのではないかと考えた。そこで、６年生に事前アンケートを取ると、図９のように６年生の半数がパラリンピックについてあまり知らなかった。知っていると答えた子どもたちも、競技の名前を聞いたことがある程度で、詳細については知らないことがわかった。




【図９　アンケート結果】

子どもたちへ知らせると、「自分たちもパラリンピックについて知らないから、調べて教えたいな。」と意欲が高まり、課題を提示すると、「わぁ、やってみたい。」と歓声があがった。その後、パラリンピック関連の書籍を廊下の本棚に並べておくと、自分たちで読む姿があり、子どもにとって必然性のある課題設定が、教室をこえて自ら学ぼうとする主体的な学びへつながった。

② 視点２　ＩＣＴを活用した協働的な学びの工夫

a　課題解決の手立てを探る教材文を用いた協働的な学びの工夫

１２月実践では、身に付けたい力として「要約してまとめる」ことを挙げ、本単元の学習に入った。毎時間の最初に、必然性のある課題である単元のゴールと、そのために身に付けたい力について掲示し（図１０）、確認していくことで、相手知識・目的意識を持って主体的に学習に取り組んでいった。

その後、教科書本文をもとに要約する学習活動を、次の流れで実践した。

ア　段落のおおまかな内容をつかむ

例えば、７段落は「ボッチャについての説明」であることを全体で確認する（図１０のア）。このように、各段落で筆者が伝えたいことをおさえることで、大事な言葉や文を見つける着眼点が焦点化された。

イ　要約に必要な、大事な言葉や文を見つけ、精選する

要約するときに必要な、大事な言葉や文を探し、全体で共有していった。その際、「ランプ」という言葉の必要性に気付いた場合には、「ランプ、つまり使う道具のこと」というように、大事な言葉や文を探すときのキーワードとして位置付けていった（図１０のイ）。このキーワードが、のちに大事な言葉や文を図鑑等から探すときに生かされていった。

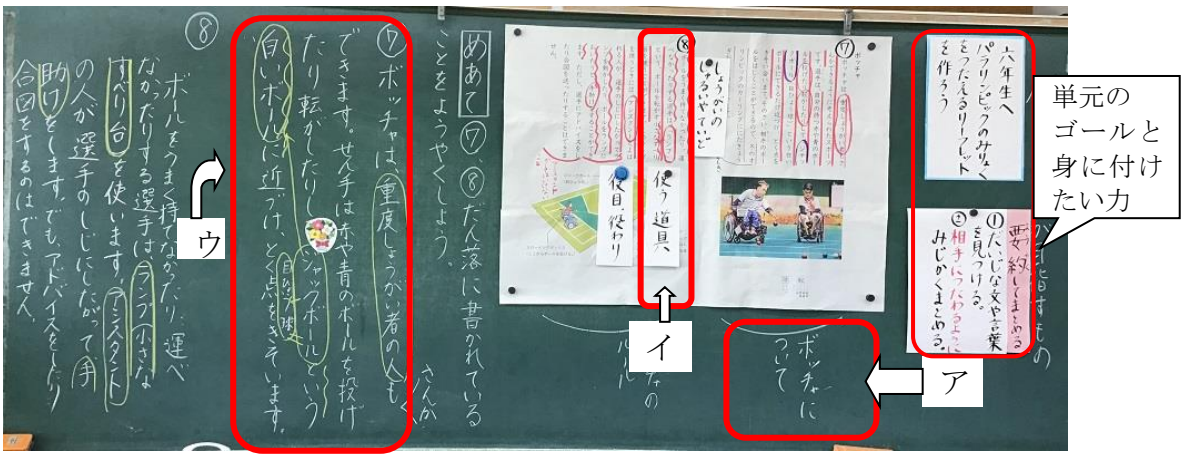
その後、子どもたちが見つけた大事な言葉や文は、要約するときに本当にすべて必要なのか、全体で精選していった。このときに、以下のような子どもの発言が見られた。

| |
|---|
| T　全部の文が大切となりましたが、全ているのかな。<br>C　「冬のカーリングに似たきょうぎだ」のところは、<u>要約のときにはいらない</u>と思います。その前の部分は、ルールのことなので<u>６年生には知っててほしいからいる</u>と思うんですけど、冬のカーリングに似てるっていうのは、豆知識みたいなことなので、書かなくてもいいと思います。 |

このように、課題解決の手立てを探ることを目的として教材文を読み取ることで、目指す単元のゴールに向けて話合いが焦点化されていった。

ウ　要約する

各段落の最後には、一人一人が教科書本文を用いて要約を行い、全体で一つの要約を作り上げていく活動を行った（図１０のウ）。全ての段落を、先述した手順に沿って要約するという経験を積んでいくことで、身に付けたい力の確実な定着へつながった。また、この学習過程は、リーフレットを作成するときに活用され、子どもたちは、自信を持って課題解決に取り組むことができた。




【図１０　実際の板書】

b　課題解決を目指す協働活動の工夫

ＩＣＴの活用に慣れてきた子どもたちへ、ロイロノートと MetaMoJi ClassRoom という２つのアプリを活用し、３人で１つのリーフレットを作成した。その際、以下の手順で行った。

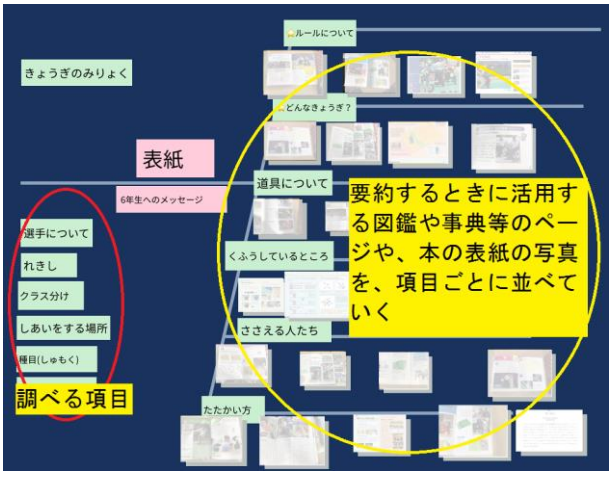
ア　思考ツールを活用し、リーフレットの構成を考える。

子どもたちがもっと調べてみたい競技を選び、３人で１つの競技についてリーフレットを作成していった。リーフレットの構成を考え、調べる段階では、ロイロノートを活用した。

まず、グループごとに図１１の思考ツールを活用して、リーフレットの構成を考えた。その際、調べる項目を１人２項目ずつ選んで、３人で構成を考えることで、調べたいことや伝えたいことがグループで共有され、ともに課題解決に向かう協働的な学びへとつながった。

イ　図鑑や事典で調べた内容を共有する。

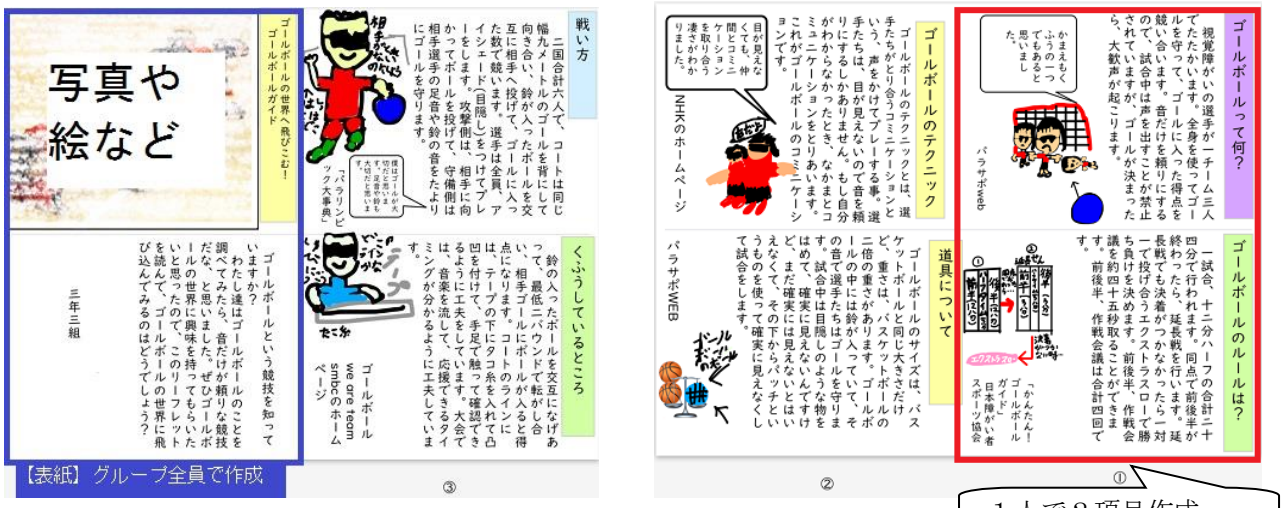
調べる項目を決めた後、事典や図鑑等を用いて調べる学習を行った。このとき、図１１の思考ツールへ、「要約するときに活用したいページ」と「調べた本の題名や出版社等が分かるページ」の２枚の写真を１セットとして資料を添付していった。この思考ツールを用いた調べ学習を行うことで、３人がお互いの進捗状況を確認し合い、協働的に課題解決に向けて取り組むことができ、対話的な学びが促された。また、調べたことを写真で記録しておくことで、見直したり、大事な言葉や文を見付けて書きこむことができたり、リーフレットを作成する上でも有効な手立てとなった。



【図１１　思考ツール】

ウ　リーフレットの作成

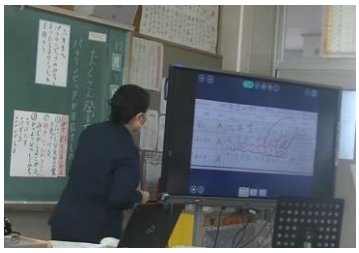
グループでリーフレットを作成する際には、MetaMoJiClassRoom のシート（図１２）を活用した。３人がシートを共有し、同時に作業することが可能であるため、協働的な学びを進める際に有効であった。このことで、要約の記述の仕方や、図や写真の効果的な活用の工夫をお互いに学び合う姿が見られた。また、進捗状況がわかるため、互いにアドバイスをしながら作成する姿が見られ、対話的な学びにつながっていった。



【図１２　リーフレット作成シート】

③　視点③　ルーブリックを活用した評価の工夫

a　学習の見通しと振り返りの共有化を図る毎時間の評価の工夫



【図１３　毎時間の導入】

ルーブリックを活用した振り返りの共有をより図るために、毎時間の導入場面で振り返りの記述を紹介した（図１３）。これは、子どもたちが前時の学習をふまえて本時の学習へ見通しを持つために有効であった。また、他の子どもたちの記述から、表現の仕方を学び、ふり返るときの視点を得ることで、学び方を共有することができた。

実際に、毎時間の振り返りの記述が精選されていき、より子どもたちが自己の変容を捉えて学びを実感する、深い学びへつながったと考える。

b　子どもとともに作る成果物のルーブリックをもとにした評価の工夫

より単元最後に目指す子どもの姿を具現化、共有化することのできる成果物のルーブリックを作成することを目指した。

教科書本文の読み取りを終えた後、「大事な言葉や文を見つけて要約すること」や、「読んで相手に伝わることが大切であること」を学び、リーフレット作成に生かせるということに、子どもたち自身が気付いていった。また、教科書本文を要約した文をもとに、具体的な例も一緒に考え、記述した。子どもとともに図１４の成果物のルーブリックを作成したことで、より単元のゴールとして目指す姿を共有することができた。

「パラリンピックリーフレット」のルーブリック

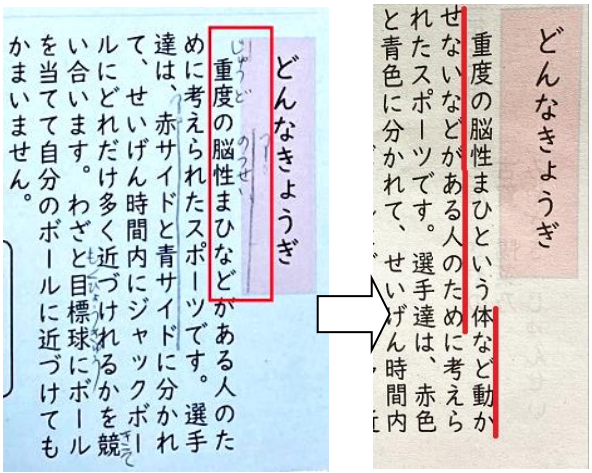
| | S | A | B | C |
|---|---|---|---|---|
| 内容 | 大事な言葉や文を見つけてまとめてあり、さらに書きかえたりおぎなったりして、わかりやすく書いている。<br>ボッチャは、自分のもつボールを投げたり転がしたりして、ジャックボールという白いボールにできるだけ近づけてとく点をきそうスポーツです。 | 大事な言葉や文を見つけてまとめてあり、わかる。<br>ボッチャは、自分のもつボールを投げたり転がしたりして、ジャックボールに近づけてとく点をきそうスポーツです。 | 大事な言葉や文を見つけてまとめているが、わかりにくい。<br>ボッチャは、ジャックボールに近づけてとく点をきそうスポーツです。 | 調べたことをそのまま書きうつしている。 |
| 表現 | 読み手をひきつけるような見出し、写真が使ってある。 | 説明にあった見出し、写真が使ってある。 | 見出し、写真が使ってある。 | どちらも使っていない。 |

【図１４　成果物のルーブリック】

さらに、より伝わるリーフレットにするために、ルーブリックを用いて、学級内で推敲を行った。このとき、推敲の視点を全体で共有するために、評価ごとにＳは「花丸」、Ａは「○」、Ｂは「？」とし、これらのマークを書いて評価していった（図１５）。短い時間で推敲し、推奨点や改善点を知らせる視覚的支援として有効であった。

【図１５　加筆したルーブリック】

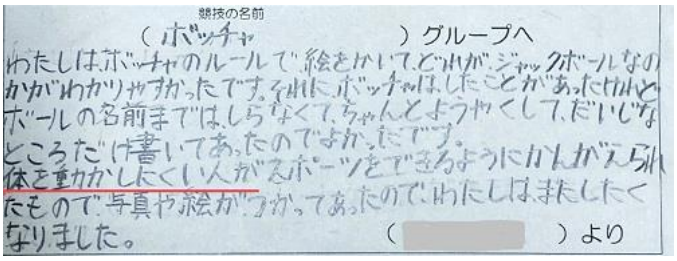
推敲の際、図１６のように、「重度の脳性まひなど」という記述に対して、推敲後に「？」がついていた。さらに子ども同士で話合いを行うと、「重度の脳性まひって何か書いたほうがいいよ。」というアドバイスをもらっていた。この協働的な学びを経て、６年生に伝わるように書き直す必要性に気付き、「重度の脳性まひという体などが動かせないなど」と、よりわかりやすい表現を見いだしていった。



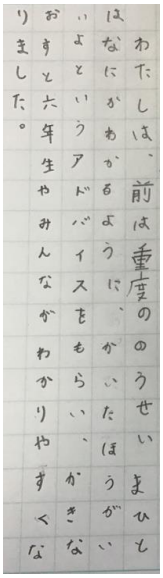

【図１６　推敲前後のシート】

このように、教室をこえ、６年生にパラリンピックの魅力を伝えるという相手意識や目的意識を持

って、子どもたち同士でよりよいリーフレットに作り上げていく姿が見られた。その後、リーフレットを渡した６年生と感想交流を行った。６年生から、「（ボッチャは）体を動かしにくい人がスポーツをできるように考えられたもので、（中略）またしたくなりました。」と、推敲で書き直した部分の分かりやすさに着眼した感想が返ってきた（図１７）。感想交流後の振り返りでは、「アドバイスをもらい、書き直すと（中略）わかりやすくなりました。」と、自己の変容を捉えて学びを実感していく子どもの姿が見られた（図１８）。


競技の名前
（ボッチャ　）グループへ
わたしはボッチャのルールで絵をかいてどれが、ジャックボールなのかがわかりやすかったです。それにボッチャはしたことがあったけれどボールの名前までは、しらなくてちゃんとようやくしてだいじなところだけ書いてあったのでよかったです。
体を動かしにくい人がスポーツをできるようにかんがえられたもので写真や絵がつかってあったのでわたしはまたしたくなりました。
（　　）より

【図１７　６年生の感想】


わたしは、前は重度ののうせいまひとおすと六年生やみんなからアドバイスをもらいかいたほうがいいよというアドバイスをもらいかいたほうがいいはなにかもがるようにしました。

【図１８　振り返り】

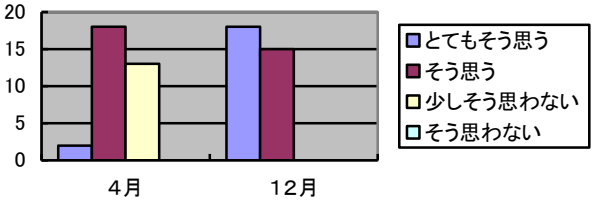
## ６　研究の成果と課題

（１）成果

① 視点１　必然性のある課題に出会う導入の工夫

必然性のある課題に段階的に出会う導入の工夫を行うことで、教室をこえて自ら学び合う主体的な学びにつながると考えた。子どもたちへ、「自分から進んで学習に取り組んでいますか。」というアンケートを行った（表１）。すると、４月当初と比較すると、多数の子どもが取り組んでいると答えている。さらに、もっと取り組んでみたいこととして、検証授業後にさらなる課題を見いだし、さらに教室をこえて学ぼうとしている子どもが多かった（図１９）。このように、必然性のある課題に出会うことで、教室をこえて自ら学び合う主体的な学びにつながっていった。

【表１　主体的な学びへの意識の変容】



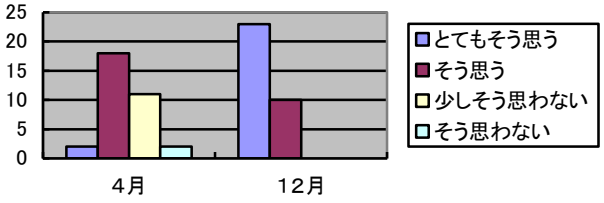

もっと取り組んでみたいこと
・リーフレットみたいなものを、友達とまた作りたい。
・もっと自分が作ったものをたくさんの人に見てほしい。
・もっと要約ができるようになりたい。
・いろんな人に伝えたい。

【図１９　回答理由の一部】

② 視点２　ＩＣＴを活用した協働的な学びの工夫

ＩＣＴを活用した協働的な学びの工夫が、他者と学び合い、課題解決に向かう対話的な学びにつながると考える。「友達と協力して課題に取り組んでいますか。」という問いに対して、４月当初はあまり取り組んでいないという子どもが多かったが、実践後は他者との学び合いへの意欲が高まっていることがわかる（表２）。また、図２０の回答理由にもあるように、協働的な学びが自分も相手も高め合えると実感し、対話的な学びへつながっていったといえる。

【表２　対話的な学びへの意識の変容】

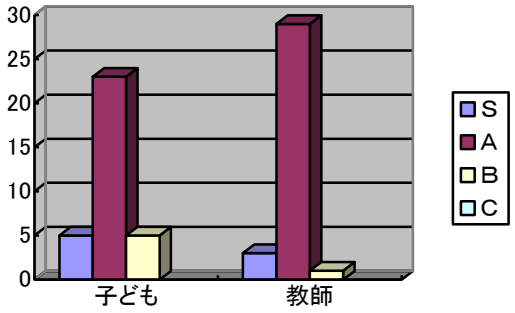



回答理由
・友達のよいところを取り入れてみんながもっとよい書き方になるから。
・困っていても、助け合えるから。
・友達ともっと仲が良くなるから。
・みんなで学習すると楽しいから。

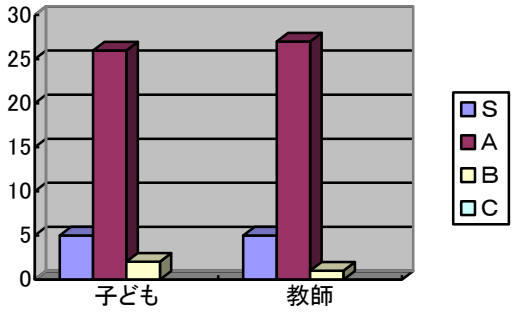
【図２０　回答理由の一部】

③　視点③　ルーブリックを活用した評価の工夫

ルーブリックを活用した評価の工夫が、子どもが自己の変容を捉えて学びを実感する深い学びにつながると考える。成果物のルーブリックをもとに、７月実践と１２月実践でそれぞれ作成した成果物に対して、子どもたちの自己評価と、教師による評価の比較を行った。



【表３　７月実践での評価】



【表４　１２月実践での評価】

７月実践のときには、表３のように、子どもと教師の評価に差が見られた。ルーブリックをもとに評価をすることがこのとき初めてであったため、差があるものの、学びの変容を捉える姿が多く見られた（Ｐ４【図５】、Ｐ５【図８】参照)。１２月実践では、ルーブリックに具体的な例を明示して単元のゴールを共有し、推敲の際にはマークを用いた評価の工夫を行った。そのため、表４のように、子どもと教師で評価にあまり差はみられなかった。このように、子どもが自己の変容を捉えて学びを実感していったため、深い学びにつながっていった。

（２）課題

○必然性のある課題との出会いには、子どもたちが伝えたいと思う相手の方の協力が必要である。今回は、保護者の方や６年生のみなさん、担任の先生方の協力があって課題解決に向けた学習が成り立っている。教室内での子ども同士での学び合いを基盤としながら、子どもたちが伝えたい相手へ、学んだことを生かして伝える場の設定を、教室内外で模索していきたい。

○協働的な学びでの学び合いは、国語科授業だけではなく、他教科との関連をふまえて実践していくことがより効果的である。今後はカリキュラムマネジメントの視点を取り入れた国語科実践を模索していきたい。

○ルーブリックでの評価の際、他者と比較して評価をする子どもが数人いた。特に苦手意識の持つ子どもたちへ、他者と比べるのではなく、自分の変容を捉え、成長を実感できるような、個人内の伸びを実感することのできる評価の工夫を行い、誰もが学びを実感できるような実践を目指していきたい。

## ７　引用文献・参考文献

1) 文部科学省　『小学校学習指導要領解説　国語編』　２０１８
2) 水戸部修治編著 『実践国語研究』 明治図書　２０２１
3) 令和版　学びわくわく熊本市の授業づくり
4) 西岡加名恵・石井英真編『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価　「見方・考え方」をどう育てるか』日本標準　２０１９
5) 菊池英慈編著　『資質・能力を育成する小学校国語科授業づくりと学習評価』明治図書　２０２１